The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『われらの詩』と朝鮮戦争
Author(s)	川口, 隆行
Citation	日本学報. 2014, 33, p. 111-123
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27061
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『われらの詩』と朝鮮戦争

川　口　隆　行

はじめに

1945年８月の広島、長崎への原爆投下は、アジア太平洋戦争を終結に導いた記念すべき出来事として、米国によって正当化されました。米国の「核」は、平和構築に必要不可欠という認識を広く一般化させることで、冷戦期から現在に至る米国主導の東アジアの地域形成を支えもしました(50年代から始まる米国主導のAtoms for peace＝「核の平和利用」もそれと関わっているでしょう)。日本は、原爆投下責任を米国に問うことを避け、むしろそれを曖昧にすることで、米国の東アジア戦略の一翼を担うことを選びます。そして、帝国日本の植民地であった韓国、台湾は、解放者としての米国とそれを象徴する原爆投下という歴史観を引き受けることで、米国の東アジア戦略に深く組み込まれ、主体的な脱植民地化の契機を奪われます。冷戦期における日韓関係、日台関係は、日米安保という米国との軍事同盟に後押しされた保守政権と、やはり米国を後ろ盾とする韓国、台湾の軍事政権との間に形成されました。こうした東アジアの地域形成と秩序改編を考えるうえで重要なのが50年代、なかでも朝鮮戦争前後です。朝鮮戦争は東アジアの冷戦構造が形成される過程そのものであり、グローバル冷戦が終結した現在においてなお、東アジアとは同戦争の痕跡の上に在ります。また、朝鮮戦争は「朝鮮特需」という言葉に象徴されるように、日本においては経済成長の跳躍台と一般には理解されました。日本の「復興」は、アジア諸国の発展モデルともなり、日本型開発モデルをいち早く取り入れた韓国、台湾の産業構造、社会形成、文化意識にも大きな影響を及ぼします。ここで再び広島に目をむけますと、朝鮮戦争前年の1949年８月６日、GHQの後押しもあって広島平和記念都市建設法が制定されます。多額の予算が投じられ、「朝鮮特需」を一歩先取りするかのようにインフラ整備が開始、国際平和都市としてめざましい「復興」への道を歩み始めます。

セッションのテーマ「グローバル冷戦と文化―広島／日本／東アジアから考える―」に沿った、私なりの雑駁な歴史的見取り図です。ローカル（広島)、ナショナル（日本)、リージョナル（東アジア）という三つの空間的位相の関係をゆるやかに意識しつつ、グロー

バル冷戦と文化について考察を深めること、それがこのセッションの大きな狙いと受け止めています。私に与えられた具体的な役回りは、朝鮮戦争期の広島で発刊されたサークル詩誌『われらの詩』を題材に、できるだけテーマに適った問題提起をすることでしょう。『われらの詩』と関連雑誌の幾つかは、今年６月に三人社から復刻が刊行、宇野田さんと一緒に解説を書かせて頂きました。その際、宇野田さんが運動史的背景からの整理を、私は詩作品の特徴を説明するという分担をしました。今回の報告では、解説で書いたことを、朝鮮戦争との関係を軸に再整理し、セッションのテーマにつなげてみます。ですので、すでに解説に書いた内容とかなり重複がありますが、その点は、あらかじめご承知ください。

１．『われらの詩』をどう読むか

『われらの詩』は、被爆地広島において「原爆詩人」峠三吉を中心に、1949年11月に創刊されます。まさに冷戦のグローバル化の波に東アジアも呑みこまれようとしていた頃です。朝鮮半島では南北分断の固定化が深く浸透、中国大陸では共産党が国共内戦に勝利、1949年10月１日には中華人民共和国が成立、国民党は台湾に脱出します。そして、1953年11月に20号で終刊を迎える『われらの詩』は、朝鮮戦争開戦（1950年６月）から停戦（1953年７月）までの期間を丸ごと含んでいます。端的に言って、朝鮮戦争期に被爆地広島で刊行されたこの雑誌を、いま、どのように読めば良いのか、という課題がありそうです。しかし、一般的には、原爆使用が喧伝された朝鮮戦争下において、広島の詩人たちが反戦平和あるいは反原爆を唱えるのは、不思議でもなんでもなく必然の道理だ、といった見方がされてきました。今回復刻が出た際に幾つかのメディアから取材を受けましたが、やはりそのような反応を示されたところもありました。

峠や『われらの詩』は、これまでどのような歴史的布置にあったのでしょうか。ここでは、今堀誠二『原水爆時代　下』（三一書房、1960年８月）を参照することで、問題の大枠を示しておきます。『原水爆時代』は、「広島独自」の原水禁運動が全国的に展開、高潮する過程を詳述した同時代史の労作であり、原爆文献の古典の一つといってもよいものです。

1949年６月、広島では日鋼争議という大規模な労働争議が起こります。米ソ対立の激化によって、GHQの占領政策は、日本の「民主化」を推進する立場から、反共の砦として経済復興を優先させる方針へ転換します。ドッジラインによるデフレ政策、労働者の失業・解雇の動きが全国に広がり、広島日鋼争議もそうした状況で起きた事件の一つです。峠三吉の「怒りのうた」が闘争の現場で朗読されたように、峠を語るうえで日鋼争議との関係は看過できませんが、『原水爆時代』においては、意外にもその位置づけは高いものではありません。今堀は、「組合では目先きの現象にとらわれて、首切り反対、または民

主主義擁護の争議をはじめた。三吉もそのペースに乗ってしまった。「怒りのうた」は、原爆戦争を準備するものに対する怒りをうたっていなかった」と断じます。この場合、「民主的な権利を守れという主張」は時代の大きな本質をとらえ損ねた、無力な空念仏と同義です。

今堀は、日鋼争議ではなく、峠や時代の転換点として、1949年10月２日に広島女学院中学校で開催された平和擁護大会に注目します。ちょうど、「われらの詩の会」発足準備が進んでいた頃です。今堀は、峠が議長として発表した原爆禁止宣言について、「これは日本における原爆反対運動のハシリであり、原爆詩人として、彼が生れ代った日でもあった」と非常に高く評価し、「原爆詩人」峠三吉の誕生を謳います。さらに「日本における原爆禁止運動の第一声となった大会宣言は、原子爆弾廃棄を要求するヒロシマの声を、全世界に力強く訴えていた」とも述べ、翌年３月に平和擁護世界大会第３回常任委員会が採択したストックホルムアピールの先駆けをここに見出します。ちなみに広島の大会では、今堀も峠らとともに議長席に座っていました。確かに、占領下広島における原爆禁止宣言は、過去の原爆投下を正当化し「自由」と「民主」のためなら将来の使用も憚らないと公言する米国政府の立場と鋭く抵触します。

ただ、正直なところを言えば、今堀の評価は、いささか過大にすぎるのではという印象も拭えません。大会前日は、先にも触れた中華人民共和国成立が宣言された日です。原水禁運動の理論家で、しかも中国史の専門家であった今堀にとって、それは単なる偶然ではありません。日鋼争議の敗北を「これは時を同じくして世界史の檜舞台にその巨姿を現わすに至った中華人民共和国の成立に比べて、あまりにも対照的」「両国の運命の分れ道」「三吉のなやみは深刻をきわめた」と述べるように、今堀は、現代中国を合わせ鏡のようにして現代日本を認識しようとします。翻って言うならば、広島で開催された平和擁護大会は、中華人民共和国成立と並ぶような世界史的意義を有する出来事として位置付けられることで、その意義が保証されていると言っても良さそうです。

今堀が気に掛けるのは、「広島・長崎の原爆悲劇を日本国民は永い間じっと耐え忍んできましたが、ビキニの水爆実験により三たび恐るべき災害をうけるにいたって、その憤りは爆発しました」（安井郁）といった同時代史の整理から、占領下広島の文化運動、社会運動が取りこぼされることでした。原水禁運動と広島、長崎の被爆者援護を強く結び付けようという狙いもあったと思われます。彼の同時代史叙述は、広島というローカルな場所での峠や「われらの詩」の活動についても、ナショナルな原水禁運動の前史、さらにはグローバルな原水禁運動の源流として位置づけることによって、歴史の「正統的」位置に置きなおそうと試みるものであったわけです。ところで、平和擁護大会の記述には、次のような描写も存在します。

約三〇〇人くらいの小じんまりした集まりで、労働者は殆どいないのではないかと疑われるほどであった。反対に、在日朝鮮人が意外に多く、女性とくに中年の朝鮮婦人の出席が目立った。八月に在日朝鮮人連盟が団規法で解散させられたため、彼等は朝鮮で戦争を起す準備として、在日朝鮮人の組織が破壊されたのではないかと心配し、主婦や母親が大挙して来会した様子であった。

団規令（団体等規正令）によって、日本共産党の強い影響下にあった朝連が解散させられたのは９月８日です。それはともかく、ここからは、朝鮮戦争が身近に迫りつつある頃の、広島の在日朝鮮人の動向がかすかにですが伝わってきます。当然、原爆に遭った者や家族・親類を失った者もいたでしょう。一方、「子供を放射能から守れ」というスローガンを掲げて、杉並区の主婦や母親の運動として始まったとされる1954年以後の原水禁運動にまつわる表象が、遡及的に投影されているようでもあります。ただ、ここで注意を払いたいのは、ジェンダーとともに民族という視点が交錯している点です。今堀は、大会の展開について、「議事は何となく空虚な感じで包まれ、会場はだらけ切った」、だがそのような「大会を救ったのは若い婦人と子どもであった」と述べます。名前から判断する限り二人は日本人と思われ、彼らが語ったとされる内容は、死んだ幼子と傷ついた「原爆乙女」のイメージに収斂されます。峠の発した原爆禁止宣言はその到達点に位置するわけです。50年代後半のパースペクティヴからする『原水禁時代』では、「在日朝鮮人が意外に多く、中年の朝鮮婦人の出席が目立ったこと」は、ナショナルな、さらにはグローバルな原水禁運動の起源に垣間見える微細なノイズにすぎません。

現在、『われらの詩』を読むにあたって求められることの一つは、こうしたノイズを見逃さないこと、そしてそれを、今堀のように冷戦体制確立後からなされた歴史的見取り図に回収するのではなく、「被爆地広島」と「朝鮮戦争」の関係性を時代の文脈に即しながら位置づけることでしょう。この点において、本セッションで言う「東アジア」というリージョナルなレベルの設定はやはり有効な方法概念でしょう。

今堀は、「労働者は殆どいない」「反対に、在日朝鮮人が意外と多い」「それも中年の朝鮮婦人」といった具合に、労働者と在日朝鮮人を区別し、さらに在日朝鮮人男性と女性を切りはなします。最近、小沢節子さんが「再考・丸木俊の画業―裸婦と朝鮮人女性の表象」という論考で、丸木俊が1949年夏頃に描いた《広島日本製鋼事件によせて》という絵画に言及されています。小沢さんは、この絵画に描きこまれた、労働者の妻／家族と見られるチマチョゴリを着た朝鮮人女性の存在を指摘しています。これは想像にすぎませんが、今堀が平和擁護大会で目撃したという、在日朝鮮人の「主婦や母親」は、俊の絵画に描か

れた日鋼争議を闘った人たちでもあったのではないでしょうか。

２．朝鮮戦争下における原爆表現の生成とサークル詩誌―林幸子の場合―

小沢さんは、丸木俊の姿勢について、それが当時の共産党の方針に沿ってなされた可能性について触れ、次のようにも述べておられます。「もっとも、夫妻は、一九四九年の後半には、翌年二月に発表することになる「原爆の図」第一部《幽霊》共同制作に集中しており、作品が未完成のように見えるのもそうした事情と関係しているのかもしれない。つまり、俊は同時代の闘争を描くことから、被爆体験の表現へとさかのぼったである」。

この指摘は、峠や『われらの詩』を考えるうえでも示唆的です。結論めいたことを先取りして言いますと、「原爆詩人」と言われる峠ですが、朝鮮戦争を経ないで最初から「原爆詩人」だったわけではありません。朝鮮戦争という現実に向きあうなかで、原爆の記憶が呼び覚まされ、それを詩として再構成していったのではないかということです。もちろん、峠は1945年８月に広島で原爆を体験していますし、『われらの詩』に関わる以前にもその体験を詩にしようと試みたこともありました。ですが、朝鮮戦争がなかったら、おそらく『原爆詩集』も今あるようなものとしては存在しえなかったのではないかと思われてなりません。

峠について述べる前に、まずは、林幸子という女性詩人を取り上げてみたいと思います。林は、『われらの詩』における典型的なサークル詩人であり、今日なお有名な「ヒロシマの空」という作品を残した人物です。ここでは、彼女に注目しながら、朝鮮戦争下における原爆表現の生成とサークル詩誌の関係を考えてみたいと思います。

林は、山中高等女学校の専攻科生であった16歳のとき、動員先の工場で被爆しました。母と弟は自宅の下敷きになり、歯科医だった父はなんとか這い出たのですが、翌月には亡くなっています。「ヒロシマの空」はこうした自身の体験を表現したものですが、そこに到るには、『われらの詩』の活動が必要でした。林は『われらの詩』の活動を通じてサークル詩人として急速に成長、そのプロセスにおいて原爆体験の意味を発見、再構成する力を獲得していきます。

林は『われらの詩』には創刊から参加、作品としては「パントマイム」（第１号）、「師走の町」（第２号）、「城あとのひとたち」（第３号）、「希望の歌声―メーデの日に―」（第６号）、「黒いひまわり」（第８号）、「ヒロシマの空」（第10号）、「断片」（第12号）、「日本の青春」（第13号）を発表しています。町由起子名義で発表された第１号から第３号までは、率直に言えば感傷的ないかにも文学好きの少女の作といった感じです。「城あとのひとたち」では被爆者の戦後の生活を描こうとしていますが習作の域を出ていません。だが、林幸子を名乗る第６号から社会的広がりをもった題材を選択するようになります。

そして第８号では、「黒いひまわり」を発表します。「バラツクの街」にいまだ徘徊する「三十幾万の亡霊」を幻視し、「生き残つたひとびと」に「消えがたい血をしたゝらせて」「爆音がかぶさる」光景を、鮮烈に描き出します。もちろんこの「爆音」とは朝鮮半島に爆撃に向かう米軍飛行機のそれです。第８号は「平和特集号」として1950年８月６日に刊行されています。実は、明らかに『われらの詩』で原爆体験を主題とする詩が増加するのはこの号からです。ほかには、且原純夫「ヒロシマ」、秦忠雄「奇蹟」、浅野理枝「悲しい記録」、多賀孝子「原爆の残した音楽―ある救護人の話から―」、東海草「広島の焼け跡」などが掲載されています。

第８号と同時に、峠や深川宗俊など『われらの詩』に参加していた有力メンバーが、「戦闘的プロパガンダを行うことを課題」（宇野田尚哉）として、『反戦詩歌集』第二集が刊行されます。林は、この雑誌にも「三百十一号違ハン」という闘争詩を発表しています。これは、1950年７月に広島でおきた「朝鮮問題声明書配布事件」を題材にしています。共産党と祖国防衛委員会主導で行われた反戦運動に関して、勅令311号違反（占領目的阻害罪）で共産党員13名、朝鮮人11名が逮捕された事件です。『われらの詩』の書き手であり恋人でもあったアオノ・マサミが逮捕されたこともあってか、林は裁判を傍聴します。この詩には、「どなる労働者　学生／口惜し涙の小母さんたち／朝鮮のこども　むすめ／同志の押し込められた／塀をとりまき／よじのぼり／声のかぎりうたう／インター」といったフレーズが登場します。

こうしたプロセスを経て「ヒロシマの空」が登場します。掲載されたのは1950年12月に刊行された第10号です。この詩の大きな構造は、父親と娘「わたし」の経験の反復にあります。迫りくる炎を目前にして父親は妻と息子を見捨てて逃げます。生き延びるためには「どうしようもなかつた」のかもしれません。しかし「――死んで　しまいたい！」と泣き叫ぶ姿を見ても、単純に割り切れるものではありません。そして、「どうしようもなかつた」という言葉は、原爆症を発症した父親を介護も空しく救えなかった「わたし」の葛藤としてそのまま跳ね返ってきます。悔恨、恥辱、罪責感の連鎖あるいは共有。カタストロフィからの生還者たちが抱えるというサヴァイヴァーズ・ギルト（Survivor's guilt）、それを基盤とする共同性の発生といった説明も可能でしょうが、先を急ぐまえに、もう少しこの詩の表現性に即して読み解くことが必要でしょう。

あゝ／お母ちやんの骨だ／あゝ　ぎゆつ　とにぎりしめると／白い粉が　風に舞う／お母ちやんの骨は　口に入れると／さみしい味がする／たえがたいかなしみが／のこされた父とわたしに／おそいかゝつて／大きな声をあげながら／ふたりは　骨をひらう／菓子箱に入れた骨は／かさかさ　と　音をたてる

弟は　お母ちやんのすぐそばで／半分　骨になり／内臓が燃えきらないで／ころりと　ころがつていた／その内臓に／フトンの綿が　こびりついていた

――死んで　しまいたい！／お父ちやんは叫びながら／弟の内臓を　だいて泣く／焼跡には鉄管がつきあげ／噴水のようにふきあげる水が／あの時のこされた　唯一の生命のように／太陽の　ひかり　を浴びる

わたしは／ひゞのはいつた湯呑み茶碗に水をくむと／弟の内臓の前においた／父は／配給のカンパンを　だした

わたしは／じつ　と　目をつむる／お父ちやんは／生き埋めにされた／ふたりの声をきゝながら／どうしようも　なかつたのだ／それから／無傷だつたお父ちやんの体に／斑点がひろがつてきた

乳児は口唇による摂取によって母親に出会うと言われます。「にぎりしめ」てもこぼれ落ちる母親の存在を、「わたし」は「口に入れる」という最も原初的な方法で確認しようとしますが、それは「さみしい味」がするばかりです。生と死に分かたれた愛しい存在との同一化の試みは、永劫かなえられることはありません。父親が「弟の内臓を　だいて泣く」という表現もまたそうですが、グロテスクなまでの即物性と親子の愛情という抒情性が拮抗することが、この詩の魅力の源泉のひとつになっています。

それは九月一日の朝／わたしはキウリをしぼり／お砂糖を入れて／ジユウス　をつくつた／お父ちやんは／生きかえつたようだと／わたしをみて笑つたけど／泣いているような／よわよわしい聲

ふと、お父ちやんは／虚空をみつめ／――風がひどい／嵐がくる……嵐が／といつた

ふーつと大きく息をついた／そのまゝ／だつくりとくずれて／うごかなくなつた／ひと月も　たたぬまに／わたしは／ひとりぼつちになつてしまつた

さて、父親が臨終を迎える「九月一日の朝」の場面には、やや唐突な印象を与える謎めいた言葉が刻まれます。「ふと、お父ちやんは／虚空をみつめ／――風がひどい／嵐がく

る……嵐が／といつた」というフレーズです。混濁する意識が漏らしたうわごとでしょう。しかし、なぜ「嵐」なのでしょう。歴史的事実から言えば、原爆投下から一か月余りのちの九月一七日、当時史上最大級とされた枕崎台風が広島湾に上陸、県内で死者行方不明者二千人を超える甚大な被害をもたらします。広島において原爆のカタストロフィがこの自然災害とあわせ語られることはさほど珍しくありません。だが、それだけではありません。『われらの詩』を見渡すと、「狂暴な嵐に耐えて来た同志たち／また嵐の日が近づいて来た／斗かおう　全国の同志たち」（田端重春「朝鮮冬物語」、第６号）「きなくさいほこりをたてて／嵐はふたたび吹きだした」（荒田芳太郎「顔をあげろ」、第11号）といった表現が目につきます。『われらの詩』関係者にとって「嵐」とは、朝鮮戦争の隠喩なのです。いまわのきわに発せられた父親の言葉は、敗戦直後の自然災害の記憶も響かせつつ、朝鮮戦争に日本が加担する目前の状況への警句として読むよう、パフォーマティブな効果が期待されたのでしょう。

そもそもサークル詩とは、集団創作の実践です。「嵐がくる……嵐が」という表現は、峠をはじめとするサークルの会員、それもリーダー格の男性たちによる指導、助言、介入の痕跡ともいえ、林幸子もそれを積極的に受け入れることで表現者としての主体形成を遂げたのです。1950年10月５日から９日まで爆心地近くの五流荘において、われらの詩の会主催で丸木夫妻の「原爆の図」展覧会が開催されました。この展覧会にあわせた８日の集会では、深川宗俊が「ヒロシマの空」を朗読しています。二か月後に雑誌掲載された詩との異同の有無まではわかりませんが、早くに会員間でこの詩が交換されていた事実は確認できます。こうした活動をも通じて「ヒロシマの空」は練り上げられたのでしょう。

「ヒロシマの空」の最終連には、「うつくしく　晴れわたつた／ヒロシマの／蒼い空」という表現が据えられます。タイトルからしてそうですが、ここに「反戦平和」の象徴となる「ヒロシマ」の原型を読み込むこともできます。そうした定型への志向がある一方で、この詩における「ヒロシマ」とは、「わたし」の「さみしい味」を充足させる代替物にはなってはいません。「ヒロシマの／蒼い空」を見るのは、あくまでも「涙を　流しきつたあとの／焦点のないわたしの　からだ」です。仰ぎ見たのではなく、「前を流れる河」面に映った光景を俯いたままかろうじて捉えたという解釈もできなくはありません。

恥や罪の感覚は、ややもすると「やましい良心」にとどまって、閉鎖的な共同性を構築する力となります。しかし、少なくとも私は、この詩にそうした閉ざされた感覚を覚えることはありません。「ヒロシマの空」が、いまなお私たちの情動を揺さぶってやまないとすれば、それは、即物性と抒情性の拮抗、個別具体的な体験へのこだわりと集団的な批評性からの介入あるいは定型への傾き、といった様々な力が輻輳した作品だからではないでしょうか。「林幸子」という固有名をもった個人の創作でありつつ、そこには他者との交

流の諸相が幾重にも畳み込まれています。どれほど求めようとも取り戻すことのできない愛しい存在への無数の思いが、ひとりの表現者の身体をくぐり抜けるようにして表現されています。だからこそ「ヒロシマの空」は、残酷な別れを強いる巨大な暴力について根源的な思考をうながし、恥辱の記憶をいまだ到来せぬ新たな共同性へ開くよう、読者をいざなうのでしょう。

３．「原爆詩人」と「朝鮮戦争詩人」のはざまで ―峠三吉の場合―

朝鮮戦争勃発にともない、1950年８月６日に予定されていた第４回広島平和祭（現平和記念式典）は急遽中止に追い込まれます。５日早朝、広島市警察本部は、広島市平和擁護委員会、広島青年祖国戦線準備会などが予定していた集会や行進、示威運動を「平和祭に名をかる不穏行動」、「反占領軍的又は反日本的」と断定する号外ビラを市内各所に配布、取り締まりの対象とすることを言明しました。しかし翌日には、市内中心部のデパートや広島駅付近の映画館で大量の反戦ビラがばら撒かれるという事件が勃発します。1951年９月刊行の第12号に掲載された峠三吉「一九五〇年の八月六日」は、その日の出来事を再現、現在に伝える闘争詩です。

だがやつぱりビラがおちる／ゆつくりと　ゆつくりと／庇にかかつたビラは箒をもつた腕が現れて丁寧にはきおとし／一枚一枚生きもののように／声のない叫びのように／ひらりひらりとまいおちる

鳩を放ち　鐘を鳴らして／市長が平和メツセージを風に流した平和祭は／線香花火のように踏み消され／講演会、／音楽会、／ユネスコ集会、／すべての集りが禁止され／武装と私服の警官に占領された広島

ロケツト砲の爆煙が／映画館のスクリーンから立ち昇り／裏町から子供もまじえた原爆反対署名の／呼び声が反射する／一九五〇年の広島の空を／市民の不安に光を撒き／墓地の沈黙に影を映しながら

平和を愛するあなたの方え／平和をねがうわたしの方え／警官をかけよらせながら／ビラは降る／ビラはふる

圧倒されるほどの幻想的な美的効果を生み出すために、過激な暴力シーンをあえてスローモーションで映しだす映像手法があります。そうしたことを彷彿させるあざやかな視覚

的表現です。映像と言えば、「映画館のスクリーンから立ち昇」る「ロケット砲の爆煙」は、朝鮮戦争のニュース映画かそれに類するものでしょう。スクリーン越しのバーチャルな光景は、裏町から「反射」される「子供もまじえた原爆反対署名の／呼び声」と渾然一体となって、「一九五〇年の広島の空」を超現実的空間へ創り直しています。当時流行った「現実（アクチュアリティ）の創造的劇化」（ポール・ローザ『ドキュメンタリィ映画』）という言葉も想起させます。

「ゆつくりと　ゆつくりと」落ちていくビラは、まるで輝かしい命を宿した「一枚一枚生きもののよう」です。さらに、漢字の「降る」とひらがなの「ふる」を使い分けた結びのフレーズは、下降と拡散の運動をひとつながりのものとしてイメージさせるに十分です。

「ひらりひらりとまいおちる」ビラは、このような詩的表現を媒介にして、物質的（マテリアル）な雑誌誌面を越えて、読者にも届けられます。それを手にしたひとりひとりの読者は、みずから「平和」の意味を問わねばならないでしょう。「一九五〇年の八月六日」は、占領下広島で「平和」を語る困難を伝える歴史的証言として貴重であるばかりか、「平和」という言葉の内実が常に抗争的、係争的にしか定義しえないことを美しく躍動感溢れる文体によって喚起してやまない、すぐれた文学的実践です。

この詩については、黒川伊織さんが最近発表された「〈まいおちるビラ〉と〈腐るビラ〉―朝鮮戦争勃発直後の反戦平和運動と峠三吉・井上光晴―」という論考で、井上光晴の表現と比較しながら、共産党内の国際派と所感派の対立という当時の政治的文脈に即した緻密な議論をされています。そもそも、近年、黒川さんや宇野田さんの調査研究によって、「われらの詩の会」と左派系在日朝鮮人とのつながりが、だいぶ明らかになってきました。二人の研究成果を頼りながら、「一九五〇年の八月六日」に関する事柄を簡潔に整理しておきます。

1950年８月７日の『中国新聞』には、「不穏ビラをまく　広島市警が四名逮捕」という見出しのもと、「聯合国占領軍の占領目的に有害な行為に対する処罰等に関する勅令」、いわゆる勅令第311号違反に関する記事が掲載されています。「原爆記念日に名をかる不穏行動に警告を発し、取締りに当たっていた広島市警では、六日正午ごろ祖国防衛広島県委員会あるいは日本青年祖国戦線などの名で広島市の皆様へと題する不穏ビラを同市八丁堀福屋百貨店から街路上に数万枚まいた疑いで、また同時刻に同市的場町興映劇場内で約二千枚をまいた疑いで朝鮮人四名を勅令三一一違反で逮捕した」。

戦後広島における「反戦平和」「反核」運動の象徴としてなかば伝説化されて語られもする事件ですが、逮捕者を見ても分かるように、実行部隊の少なからぬ部分を朝鮮人青年が占めていました。朱碩『在日として　被爆者として―ある民族教師の生涯』には次のような記述が見受けられます。

私の妹の夫・姜一龍は「朝鮮戦争をすぐやめろ」の反戦活動をしていた。かれは、「走りよってくる走りよってくる」ではじまる峠の詩『一九五〇年の八月六日』にでてくる「Fデパート」の屋上から、反戦ビラをふところいっぱいにかかえて気のすむまで地上に舞わせ、かけよってくる警官を煙にまいた。現行犯の証拠がない。Fデパートの買物客にまぎれて、逮捕されるにはいたらなかった。

その姜も広島の被爆者であった。峠は五〇年八月六日の平和大会にはまにあわなかったと聞いているので、「……ビラは降る。ビラは降（ママ）る」という情景は誰かに聞いたものと思われるが、姜一龍のそのビラ爆弾を峠は反戦讃歌として格調高く詩っているのである。そうしたたたかいのなかで姜は、峠ともたびたび顔をあわせている節がある。それというのも、その夏休みにかれは峠のガリ版刷りの詩集を売りにあるいていたからである。

前後の文脈から、「その夏休み」とは1951年の夏、「ガリ版刷りの詩集」とは峠『原爆詩集』のことだとわかります。1950年前後、反戦ビラ配布の舞台となった「Ｆデパート」、すなわち八丁堀福屋百貨店から通りを挟んだ向かいには、日本共産党中国地方委員会・広島県委員会・広島地区委員会が入ったビルが存在し、在日本朝鮮人連盟（朝連）広島支部も隣接していました。団体等規正令によって朝連は解散していましたが、関係事務所は引き続き付近にあったようです。共産党と左派系在日朝鮮人のつながりは広島に限るものではありませんが、こうした事情が、後の日本人による証言ではほとんど語られない点に問題の一端があるでしょう（その理由としては、直接的には55年の六全協による共産党の路線転換が大きかったと考えられます。また、先に示した今堀の例のように、ナショナルな原水禁運動の興隆、反核平和言説の定着化のなかで忘却が加速化したとも推察されます）。

やや時期を遡ると、峠は、広島詩人協会の機関誌であった『地核』第８号（1949年８月）に、入江三平名で「電車線路のつぎ目を見給え」という詩を寄せています。「銅や真鍮屑、換えてはもらった／洟たれ路地の朝鮮飴。／／ちょうせんはどうなった、いいや僕らはどうなった、／（許されたという日の丸はうしろに小さくありもするが）」といったフレーズがでてきます。出来が良い詩というのは憚られますが、峠がこの時期に在日朝鮮人の姿を捉えようとしていることはわかります。同じころ、やはり峠は、朝連主催による朝鮮解放記念日の集会（1949年８月15日）に、シュプレヒコール「人民解放の歌」を寄せています。この集会には、その年の秋に「われらの詩の会」に結集する他のメンバーも参加しており、「人民抗争歌」や「解放の歌」を歌っています。たとえば、『われらの詩』第８号に掲載されている増岡敏和「その炎はどこで燃えるか」は、先に触れた「朝鮮問題声明書

配布事件」で当時警察から追われていた李章各をうたった詩です。「私はこの雨の中に／日本語流で人民抗争歌をおくる／ノードンヂヤワ　ノーミンデルン」というフレーズには、朝鮮解放記念日の体験が組み込まれています。

前に触れた林幸子「ヒロシマの空」が朗読された1950年10月８日の集会では、のちに『原爆詩集』に収められる「墓標」が峠自身によって朗読、初公開されています。この詩は、ストックホルムアピール署名運動に奔走する「朝鮮のお友だち」、それに呼応して立ち上がった「日本の子供たち」、彼らが一緒になって「ぼくたちはひろしまの／ひろしまの子だ」と被爆死した子供たちの霊に呼びかける、という大きな構造を備えています。こうした朝鮮人による呼びかけ、日本人の応答といった構造は、『反戦詩歌集』第二集に収められた、山田朔人「意志」という短歌９首にも見られます。最初の３首を紹介します。「朝鮮人君等はたちてたたかえり独立と自由と平和を叫び」「君等叫ぶ声たかまれば街を行く人みなたちてまなここらせり」「民族の持つ相克を越えてなす平和えの叫び街にひびけり」。朝鮮半島での原爆使用に言及したトルーマン声明は同年11月30日です。声明以前から予感がなかったとは言えないにせよ、峠を含め広島の若い詩人たちは、原爆使用が喧伝されたから立ち上がったというより、朝鮮戦争の衝撃、さらには身近な朝鮮人との関わりのなかで、原爆の記憶を集合的経験として想起していったのではないでしょうか。「原爆詩人」峠三吉は、「朝鮮戦争詩人」でもあったわけです。

「一九五〇年の八月六日」には、「墓標」とほぼ似た光景として、「裏町から子供もまじえた原爆反対署名」という言葉が存在します。だが、実際の事件そして「墓標」発表から約一年後に発表されたこの詩では、「原爆反対署名」を誰がどのようなものとして担ったのか、「墓標」と微妙な差異が存在します。簡単に言えば「墓標」に存在した「朝鮮人のお友だち」の姿が「一九五〇年の八月六日」では後景に退いています。今後、政治史・運動史的文脈からも表現史的文脈からも慎重な考察がまたれるでしょう。「一九五〇年の八月六日」は、広島における様々な闘争の正統性を担保する作品として、さらには「原爆詩人」峠三吉の神話化を強く促す作品として機能、受容された側面がありました。現在、「一九五〇年の八月六日」を読みなおすには、冷戦構造の核の傘のもとで成立した「戦後日本」という枠組みを超えた、東アジア的光景の広がりに広島の街を置きなおす想像力が必要でしょう。それは、もうひとつの、ありえたかもしれない戦後広島の姿を発見＝創造することでもあるはずです。

参考文献

今堀誠二『原水爆時代　下』三一書房、1960年
宇野田尚哉「峠三吉と朝鮮人」『青丘文庫月報』第245号、2010年７月
――――「復刻版『われらの詩』解説」『復刻版　われらの詩』第２巻、三人社、2013年
川口隆行「『われらの詩』における詩作品―その詩学（ポエティック）と政治学（ポリティクス）―」『復刻版　われらの詩』第２巻、三人社、2013年
黒川伊織「日本共産党「50年分裂」と在日朝鮮人―広島の事例―」『青丘文庫月報』第236号、2009年10月
――――「峠三吉「墓標」と一九五〇年夏の広島」『原爆文学研究』第９号、2010年12月
――――「〈まいおちるビラ〉と〈腐るビラ〉―朝鮮戦争勃発直後の反戦平和運動と峠三吉・井上光晴―」『社会文学』第38号、2013年６月
小沢節子「再考・丸木俊の画業―裸婦と朝鮮人女性の表象」都留文科大学ジェンダー研究プログラム七周年記念出版会編『ジェンダーが拓く共生社会』論創社、2013年
朱碩『在日として　被爆者として―ある民族教師の生涯』朱碩先生「自分史」編集委員会、2002年
安井郁『民衆と平和―未来を創るもの―』大月新書、1955年

（かわぐち　たかゆき　広島大学大学院教育学研究科教員）